

# 無限素点における $GL(3) \times GL(2)$ に関する局所ゼータ積分

愛媛大学理学部数学科 平野 幹

Miki Hirano

Department of Mathematics, Faculty of Science, Ehime University

成蹊大学理工学部 石井 卓

Taku Ishii

Faculty of Science and Technology, Seikei University

北里大学一般教育部 宮崎 直

Tadashi Miyazaki

College of Liberal Arts and Sciences, Kitasato University

## 1 序文

$F$  は実数体  $\mathbb{R}$  または複素数体  $\mathbb{C}$  であるとする.  $\Pi$  と  $\pi$  をそれぞれ Whittaker 模型を持つ  $GL(n+1, F)$  と  $GL(n, F)$  の既約許容 Hilbert 表現とする. Jacquet と Shalika は論文 [JS] において,  $\Pi$  に付随する Whittaker 関数  $W$  と  $\pi$  に付随する Whittaker 関数  $W'$  から定義される局所ゼータ積分  $Z(s, W, W')$  は局所  $L$ -因子  $L(s, \Pi \times \pi)$  の整関数倍である事を証明した. さらに, Jacquet は論文 [Ja] において,

$$Z(s, W_1, W'_1) + Z(s, W_2, W'_2) + \cdots + Z(s, W_m, W'_m) = L(s, \Pi \times \pi)$$

となる自然数  $m$  と  $\Pi$  に付随する Whittaker 関数  $W_1, W_2, \dots, W_m$ ,  $\pi$  に付随する Whittaker 関数  $W'_1, W'_2, \dots, W'_m$  が存在する事を証明した. 我々は, より強い「任意の  $\Pi, \pi$  に対して,

$$Z(s, W, W') = L(s, \Pi \times \pi)$$

となる  $\Pi$  に付随する Whittaker 関数  $W$  と  $\pi$  に付随する Whittaker 関数  $W'$  が存在する」という主張が成立する事を期待している. この主張が  $n=1$  の場合に成立する事は, Popa の論文 [Po] で既に証明されている. また, Stade は論文 [St] において,  $\Pi$  と  $\pi$  が共に球主系列表現であれば, 球 Whittaker 関数  $W, W'$  から定義される局所ゼータ積分  $Z(s, W, W')$  は局所  $L$ -因子  $L(s, \Pi \times \pi)$  と一致する事を証明している. これらの結果に加えて, 上記の主張が  $n=2$  の場合に成立する事を証明する事ができたので, 本稿ではその結果について報告する.

## 2 基本的な記法

$l \in F$  に対して,  $F$  の加法的ユニタリ指標  $\psi_l$  を

$$\psi_l(\xi) = \begin{cases} e^{2\pi\sqrt{-1}l\xi} & (F = \mathbb{R} \text{ の場合}), \\ e^{2\pi\sqrt{-1}(l\xi + \bar{l}\bar{\xi})} & (F = \mathbb{C} \text{ の場合}) \end{cases} \quad (\xi \in F)$$

で定義し,  $F$  上のノルム  $|\cdot|_F$  を  $|\xi|_{\mathbb{R}} = |\xi|$ ,  $|\xi|_{\mathbb{C}} = |\xi|^2$  で定義する. ここで,  $|\cdot|$  は通常の絶対値を表す. また,  $\Gamma_{\mathbb{R}}(s) = \pi^{-s/2}\Gamma(s/2)$ ,  $\Gamma_{\mathbb{C}}(s) = 2(2\pi)^{-s}\Gamma(s)$  とおく.

$n$  次の単位行列を  $1_n$  と表記し,  $(i, j)$ -成分が 1 でその他の成分が 0 である 3 次行列を  $E_{ij}$  と表記する.  $t \in \mathbb{R}$  に対して,  $\text{sgn}(t)$  を次のように定義する:

$$\text{sgn}(t) = \begin{cases} 1 & (t \geq 0 \text{ の場合}), \\ -1 & (t < 0 \text{ の場合}). \end{cases}$$

$G_n$  を  $F$  上の  $n$  次一般線型群  $GL(n, F)$  とする.  $G_n$  の部分群  $N_n, A_n, K_n$  を

$$\begin{aligned} N_n &= \{x = (x_{ij}) \in G_n \mid x_{ii} = 1 \ (1 \leq i \leq n), \ x_{jk} = 0 \ (1 \leq k < j \leq n)\}, \\ A_n &= \{y = \text{diag}(y_1 y_2 \cdots y_n, y_2 \cdots y_n, \cdots, y_n) \mid y_i \in \mathbb{R}_{>0} \ (1 \leq i \leq n)\}, \\ K_n &= \begin{cases} O(n) & (F = \mathbb{R} \text{ の場合}), \\ U(n) & (F = \mathbb{C} \text{ の場合}) \end{cases} \end{aligned}$$

で定めると,  $G_n$  は  $G_n = N_n A_n K_n$  と岩澤分解される.  $n_1 + n_2 + \cdots + n_m = n$  となる  $n_1, n_2, \dots, n_m \in \mathbb{Z}_{>0}$  に対して,  $P_{n_1, n_2, \dots, n_m}$  を  $G_n$  の放物型部分群で Levi 部分群が  $G_{n_1} \times G_{n_2} \times \cdots \times G_{n_m}$  と同型であり,  $N_n A_n \subset P_{n_1, n_2, \dots, n_m}$  を満たすものとする.  $G_n$  の Lie 代数の複素化  $\mathfrak{gl}(n, F) \otimes_{\mathbb{R}} \mathbb{C}$  を  $\mathfrak{g}_n$  と表記し,  $\mathfrak{g}_n$  の普遍包絡環を  $U(\mathfrak{g}_n)$  と表記する.

## 3 $K_2$ と $K_3$ の既約表現

この章では,  $K_2$  と  $K_3$  の既約表現の実現を与える. 本稿では, 埋め込み

$$K_2 \ni k \mapsto \left( \begin{array}{c|c} k & \\ \hline & 1 \end{array} \right) \in K_3 \quad (3.1)$$

によって,  $K_2$  を  $K_3$  の部分群と見なすものとする.

### 3.1 $O(2)$ と $O(3)$ の既約表現

この節では,  $F = \mathbb{R}$  とする. まず,  $K_2 = O(2)$  の既約表現の実現を与える.  $\Lambda_2 = \{(\lambda_1, 0) \mid \lambda_1 \in \mathbb{Z}_{\geq 0}\} \cup \{(0, 1)\}$  とおく.  $\lambda = (\lambda_1, \lambda_2) \in \Lambda_2$  に対して,  $S_\lambda = \{\pm\lambda_1\}$  とおく. さらに,  $q \in S_\lambda$  に対して,  $z_1, z_2$  の多項式  $v_{\lambda, q}$  を  $v_{\lambda, q}(z_1, z_2) = (\text{sgn}(q)z_1 + \sqrt{-1}z_2)^{\lambda_1}$  で定める.

$\lambda = (\lambda_1, \lambda_2) \in \Lambda_2$  に対して,  $V_\lambda^{(2)}$  を  $\{v_{\lambda,q}\}_{q \in S_\lambda}$  によって張られる  $\mathbb{C}$  上のベクトル空間とし,  $K_2$  の  $V_\lambda^{(2)}$  上の作用を

$$(\tau_\lambda^{(2)}(k)p)(z_1, z_2) = \det(k)^{\lambda_2} p((z_1, z_2)k) \quad (k \in K_2, p \in V_\lambda^{(2)})$$

で定める. このとき,  $(\tau_\lambda^{(2)}, V_\lambda^{(2)})$  は  $K_2$  の既約表現であり,  $K_2$  の既約表現の同値類はこれらの表現で尽くされる.

次に,  $K_3 = O(3)$  の既約表現の実現を与える.  $\Lambda_3 = \{(\lambda_1, \lambda_2) \mid \lambda_1 \in \mathbb{Z}_{\geq 0}, \lambda_2 \in \{0, 1\}\}$  とおく.  $\lambda = (\lambda_1, \lambda_2) \in \Lambda_3$  に対して,  $\mathcal{P}_\lambda$  を  $z_1, z_2, z_3$  の  $\lambda_1$  次同次多項式のなす  $\mathbb{C}$  上のベクトル空間とし,  $K_3$  の  $\mathcal{P}_\lambda$  上の作用  $T_\lambda$  を

$$(T_\lambda(k)p)(z_1, z_2, z_3) = (\det k)^{\lambda_2} p((z_1, z_2, z_3)k) \quad (k \in K_3, p \in \mathcal{P}_\lambda)$$

で定める.  $\lambda \in \Lambda_3$  に対して,  $V_\lambda^{(3)} = \mathcal{P}_\lambda / (z_1^2 + z_2^2 + z_3^2)\mathcal{P}_{\lambda-(2,0)}$  上の  $T_\lambda$  の商表現を  $\tau_\lambda^{(3)}$  とする. ただし,  $\lambda - (2, 0) \notin \Lambda_3$  の場合は  $\mathcal{P}_{\lambda-(2,0)} = \{0\}$  とする. このとき,  $(\tau_\lambda^{(3)}, V_\lambda^{(3)})$  は  $K_3$  の既約表現であり,  $K_3$  の既約表現の同値類はこれらの表現で尽くされる.

$\lambda \in \Lambda_3$  に対して,  $\Lambda_2$  の部分集合  $\Sigma(\lambda)$  を

$$\Sigma(\lambda) = \{(0, \lambda_2)\} \cup \{(\mu_1, 0) \mid \mu_1 \in \mathbb{Z}, 1 \leq \mu_1 \leq \lambda_1\}$$

で定め,  $\mu = (\mu_1, \mu_2) \in \Sigma(\lambda)$  と  $q \in S_\mu$  に対して,  $v_{\mu,q}^\lambda$  を  $\text{sgn}(q)^{\lambda_2} (\text{sgn}(q)z_1 + \sqrt{-1}z_2)^{\mu_1} z_3^{\lambda_1 - \mu_1}$  の自然な射  $\mathcal{P}_\lambda \rightarrow V_\lambda^{(3)}$  による像とする. このとき,  $\{v_{\mu,q}^\lambda \mid q \in S_\mu, \mu \in \Sigma(\lambda)\}$  は  $V_\lambda^{(3)}$  の基底であり,  $v_{\mu,q}^\lambda \leftrightarrow v_{\mu,q}$  という対応によって,  $V_\lambda^{(3)}$  と  $\bigoplus_{\mu \in \Sigma(\lambda)} V_\mu^{(2)}$  は  $K_2$ -加群として同型になる.

### 3.2 $U(2)$ と $U(3)$ の既約表現

この節では,  $F = \mathbb{C}$  とする. まず,  $K_2 = U(2)$  の既約表現の実現を与える.  $\Lambda_2 = \{(\lambda_1, \lambda_2) \in \mathbb{Z}^2 \mid \lambda_1 \geq \lambda_2\}$  とおく.  $\lambda = (\lambda_1, \lambda_2) \in \Lambda_2$  に対して,  $V_\lambda^{(2)}$  を  $z_1, z_2$  の  $\lambda_1 - \lambda_2$  次同次多項式のなす  $\mathbb{C}$  上のベクトル空間とし,  $K_2$  の  $V_\lambda^{(2)}$  上の作用を

$$(\tau_\lambda^{(2)}(k)p)(z_1, z_2) = \det(k)^{\lambda_2} p((z_1, z_2)k) \quad (k \in K_2, p \in V_\lambda^{(2)})$$

で定める. このとき,  $(\tau_\lambda^{(2)}, V_\lambda^{(2)})$  は  $K_2$  の既約表現であり,  $K_2$  の既約表現の同値類はこれらの表現で尽くされる. さらに,  $V_\lambda^{(2)}$  の基底  $\{v_{\lambda,q}\}_{q \in S_\lambda}$  を

$$v_{\lambda,q}(z_1, z_2) = z_1^{\lambda_1 - \lambda_2 - q} z_2^q, \quad S_\lambda = \{q \in \mathbb{Z} \mid 0 \leq q \leq \lambda_1 - \lambda_2\}$$

で定めておく.

次に,  $K_3 = U(3)$  の既約表現の実現を与える.  $\Lambda_3 = \{(\lambda_1, \lambda_2, \lambda_3) \in \mathbb{Z}^3 \mid \lambda_1 \geq \lambda_2 \geq \lambda_3\}$  とおく.  $\lambda = (\lambda_1, \lambda_2, \lambda_3) \in \Lambda_3$  に対して,  $\mathcal{P}_\lambda$  を  $z_1, z_2, z_3, z_{23}, z_{13}, z_{12}$  の多項式で  $z_1, z_2, z_3$  につ

いて  $\lambda_1 - \lambda_2$  次同次,  $z_{23}, z_{13}, z_{12}$  について  $\lambda_2 - \lambda_3$  次同次であるもののなす  $\mathbb{C}$  上のベクトル空間とし,  $K_3$  の  $\mathcal{P}_\lambda$  上の作用  $T_\lambda$  を

$$(T_\lambda(k)p)(z_1, z_2, z_3, z_{23}, z_{13}, z_{12}) = \det(k)^{\lambda_3} p((z_1, z_2, z_3)k, (z_{23}, z_{13}, z_{12})\tilde{k}) \quad (k \in K_3, p \in \mathcal{P}_\lambda)$$

で定める. ここで,  $\tilde{k} = (\tilde{k}_{ij}) \in G_3$  は,  $k = (k_{ij}) \in K_3$  に対して,

$$\tilde{k}_{ij} = \begin{vmatrix} k_{i_1 j_1} & k_{i_1 j_2} \\ k_{i_2 j_1} & k_{i_2 j_2} \end{vmatrix} \quad \left( \begin{array}{l} i_1, i_2, j_1, j_2 \in \{1, 2, 3\} \text{ を } i \notin \{i_1, i_2\}, j \notin \{j_1, j_2\} \\ i_1 < i_2, j_1 < j_2 \text{ を満たすようにとる.} \end{array} \right)$$

で定める.  $\lambda \in \Lambda_3$  に対して,  $V_\lambda^{(3)} = \mathcal{P}_\lambda / (z_1 z_{23} - z_2 z_{13} + z_3 z_{12}) \mathcal{P}_{\lambda - (2,1,0)}$  上の  $T_\lambda$  の商表現を  $\tau_\lambda^{(3)}$  とする. ただし,  $\lambda - (2,1,0) \notin \Lambda_3$  の場合は  $\mathcal{P}_{\lambda - (2,1,0)} = \{0\}$  とする. このとき,  $(\tau_\lambda^{(3)}, V_\lambda^{(3)})$  は  $K_3$  の既約表現であり,  $K_3$  の既約表現の同値類はこれらの表現で尽くされる.

$\lambda = (\lambda_1, \lambda_2, \lambda_3) \in \Lambda_3$  に対して,  $\Lambda_2$  の部分集合  $\Sigma(\lambda)$  を

$$\Sigma(\lambda) = \{(\mu_1, \mu_2) \in \mathbb{Z}^2 \mid \lambda_1 \geq \mu_1 \geq \lambda_2 \geq \mu_2 \geq \lambda_3\}$$

で定め,  $\mu = (\mu_1, \mu_2) \in \Sigma(\lambda)$  と  $q \in S_\mu$  に対して,  $v_{\mu,q}^\lambda$  を

$$\binom{\mu_1 - \mu_2}{q}^{-1} \sum_{i=\max\{0, \mu_2 - \lambda_2 + q\}}^{\min\{q, \mu_1 - \lambda_2\}} \binom{\mu_1 - \lambda_2}{i} \binom{\lambda_2 - \mu_2}{q - i} z_1^{\mu_1 - \lambda_2 - i} z_{13}^{\lambda_2 - \mu_2 - q + i} z_{23}^i z_{23}^{q - i} z_3^{\lambda_1 - \mu_1} z_{12}^{\mu_2 - \lambda_3}$$

の自然な射  $\mathcal{P}_\lambda \rightarrow V_\lambda^{(3)}$  による像とする. このとき,  $\{v_{\mu,q}^\lambda \mid q \in S_\mu, \mu \in \Sigma(\lambda)\}$  は  $V_\lambda^{(3)}$  の基底であり,  $v_{\mu,q}^\lambda \leftrightarrow v_{\mu,q}$  という対応によって,  $V_\lambda^{(3)}$  と  $\bigoplus_{\mu \in \Sigma(\lambda)} V_\mu^{(2)}$  は  $K_2$ -加群として同型になる.

## 4 Whittaker 関数

### 4.1 Whittaker 関数の定義

$l \in F^\times$  に対して,  $C^\infty(N_n \backslash G_n; \psi_l)$  を

$$f(xg) = \psi_l(x_{12} + x_{23} + \cdots + x_{n-1n}) f(g) \quad (x = (x_{ij}) \in N_n, g \in G_n)$$

を満たす滑らかな関数  $f: G_n \rightarrow \mathbb{C}$  全体のなす  $\mathbb{C}$  上のベクトル空間とし,  $G_n$  はこの空間に右移動で作用するものとする.

$(\Pi, H_\Pi)$  を  $G_n$  の既約許容 Hilbert 表現とし,  $H_\Pi^\infty$  を  $H_\Pi$  の滑らかな元全体のなす部分空間とする. このとき, 連続  $G_n$ -準同型写像のなす  $\mathbb{C}$  上のベクトル空間  $\text{Hom}_{G_n}(H_\Pi^\infty, C^\infty(N_n \backslash G_n; \psi_l))$  は高々 1 次元である事が Shalika の論文 [Sha] で証明されている.  $H_\Pi^\infty$  から  $C^\infty(N_n \backslash G_n; \psi_l)$  への非自明な連続  $G_n$ -準同型写像が存在するとき, その像を  $\mathcal{W}(\Pi, \psi_l)$  と書き,  $\Pi$  の Whittaker 模型と呼ぶ. また,  $\mathcal{W}(\Pi, \psi_l)$  の元を  $\Pi$  に付随する Whittaker 関数という.  $\mathcal{W}(\Pi, \psi_l)$  の  $K_n$ -有限な元全体のなす部分空間を  $\mathcal{W}(\Pi, \psi_l)_{K_n}$  と表記する.

## 4.2 無限素点における局所 $L$ -因子と局所 $\epsilon$ -因子

Weil 群  $W_F$  の完全可約な有限次元表現に対応する  $L$ -因子と  $\epsilon$ -因子について簡単に復習する. 詳しくは, [HIM] の §5.1 と §5.2 を参照.

$F = \mathbb{R}$  の場合, Weil 群  $W_{\mathbb{R}}$  の既約有限次元表現の同値類は,  $L$ -因子と  $\epsilon$ -因子が

$$\begin{aligned} L(s, \phi_{\nu}^{\delta}) &= \Gamma_{\mathbb{R}}(s + \nu + \delta), & \epsilon(s, \phi_{\nu}^{\delta}, \psi_1) &= (\sqrt{-1})^{\delta}, \\ L(s, \phi_{\nu, \kappa}) &= \Gamma_{\mathbb{C}}(s + \nu), & \epsilon(s, \phi_{\nu, \kappa}, \psi_1) &= (\sqrt{-1})^{\kappa+1} \end{aligned}$$

で与えられる 1 次元表現  $\phi_{\nu}^{\delta}$  ( $\nu \in \mathbb{C}, \delta \in \{0, 1\}$ ) と 2 次元表現  $\phi_{\nu, \kappa}$  ( $\nu \in \mathbb{C}, \kappa \in \mathbb{Z}_{>0}$ ) で尽くされる.  $F = \mathbb{C}$  の場合, Weil 群  $W_{\mathbb{C}}$  の既約有限次元表現の同値類は,  $L$ -因子と  $\epsilon$ -因子が

$$L(s, \phi_{\nu}^d) = \Gamma_{\mathbb{C}}(s + \nu + |d|/2), \quad \epsilon(s, \phi_{\nu}^d, \psi_1) = (\sqrt{-1})^{|d|}$$

で与えられる 1 次元表現  $\phi_{\nu}^d$  ( $\nu \in \mathbb{C}, d \in \mathbb{Z}$ ) で尽くされる.

$W_F$  の有限次元表現  $\phi$  が  $\phi \simeq \bigoplus_{i=1}^m \phi_i$  と既約分解されるとき, その  $L$ -因子と  $\epsilon$ -因子を

$$L(s, \phi) = \prod_{i=1}^m L(s, \phi_i), \quad \epsilon(s, \phi, \psi_1) = \prod_{i=1}^m \epsilon(s, \phi_i, \psi_1)$$

で定義する. 局所 Langlands 対応により,  $G_n$  の既約許容表現  $\Pi$  は  $W_F$  の完全可約な  $n$  次元表現  $\phi[\Pi]$  に対応しており,  $\phi[\Pi]$  は  $\Pi$  の Langlands パラメーターと呼ばれる.  $\Pi$  と  $\pi$  をそれぞれ  $G_3$  と  $G_2$  の既約許容表現とすると,  $\Pi \times \pi$  に関する局所  $L$ -因子と局所  $\epsilon$ -因子を

$$L(s, \Pi \times \pi) = L(s, \phi[\Pi] \otimes \phi[\pi]), \quad \epsilon(s, \Pi \times \pi, \psi_1) = \epsilon(s, \phi[\Pi] \otimes \phi[\pi], \psi_1)$$

で定義する. Weil 群の既約有限次元表現のテンソル積は,  $F = \mathbb{R}$  の場合は

$$\begin{aligned} \phi_{\nu}^{\delta} \otimes \phi_{\nu'}^{\delta'} &\simeq \phi_{\nu+\nu'}^{\delta-\delta'} \quad (\delta \geq \delta'), & \phi_{\nu, \kappa} \otimes \phi_{\nu'}^{\delta'} &\simeq \phi_{\nu+\nu', \kappa}, \\ \phi_{\nu, \kappa} \otimes \phi_{\nu', \kappa'} &\simeq \phi_{\nu+\nu', \kappa+\kappa'} \oplus \phi_{\nu+\nu'-\kappa', \kappa-\kappa'} \quad (\kappa > \kappa'), \\ \phi_{\nu, \kappa} \otimes \phi_{\nu', \kappa} &\simeq \phi_{\nu+\nu', 2\kappa} \oplus \phi_{\nu+\nu'-\kappa}^0 \oplus \phi_{\nu+\nu'-\kappa}^1 \end{aligned}$$

と既約分解され,  $F = \mathbb{C}$  の場合は  $\phi_{\nu}^d \otimes \phi_{\nu'}^{d'} \simeq \phi_{\nu+\nu'}^{d+d'}$  となる. これらの既約分解を用いると,  $\Pi \times \pi$  に関する局所  $L$ -因子と局所  $\epsilon$ -因子を明示的に書き下す事ができる.

## 4.3 Whittaker 模型を持つ $G_n$ の既約許容 Hilbert 表現

Whittaker 模型を持つ  $G_n$  の既約許容 Hilbert 表現は一般主系列表現と  $(\mathfrak{g}_n, K_n)$ -加群として同型になる事が知られている. (例えば, [Ja] の補題 2.5 を参照.) ここでは,  $n = 2, 3$  の場合に, それらの表現の  $K_n$ -タイプや Langlands パラメーターについてまとめておく.

まず,  $F = \mathbb{R}$  の場合について述べる. 次のような  $G_1$  の表現と  $G_2$  の表現を考える:

- $\nu \in \mathbb{C}$  と  $\delta \in \{0, 1\}$  に対して,  $\chi_{(\nu, \delta)}: G_1 \rightarrow \mathbb{C}^\times$  を  $\chi_{(\nu, \delta)}(t) = (t/|t|)^\delta |t|_\mathbb{R}^\nu$  ( $t \in G_1$ ) で定義される指標とする.
- $\nu \in \mathbb{C}$  と  $\kappa \in \mathbb{Z}_{\geq 2}$  に対して,  $D_{(\nu, \kappa)}(t1_2) = t^{2\nu}$  ( $t \in \mathbb{R}_{>0}$ ),  $D_{(\nu, \kappa)}|_{SL(2, \mathbb{R})} \simeq D_\kappa^+ \oplus D_\kappa^-$  という性質で特徴づけられる  $G_2$  の表現を  $D_{(\nu, \kappa)}$  とする. ただし,  $D_\kappa^+$  と  $D_\kappa^-$  はそれぞれ Blattner パラメーターが  $\kappa$  と  $-\kappa$  である  $SL(2, \mathbb{R})$  の離散系列表現とする.

Whittaker 模型を持つ  $G_3$  の既約許容 Hilbert 表現  $\Pi$  に対して, 次のいずれかが成立する:

- (1) ある  $\nu_1, \nu_2, \nu_3 \in \mathbb{C}$  と  $\delta_1 \geq \delta_2 \geq \delta_3$  をみたす  $\delta_1, \delta_2, \delta_3 \in \{0, 1\}$  が存在して,  $\Pi$  は主系列表現  $\text{Ind}_{P_{1,1,1}}^{G_3}(\chi_{(\nu_1, \delta_1)} \boxtimes \chi_{(\nu_2, \delta_2)} \boxtimes \chi_{(\nu_3, \delta_3)})$  と  $(\mathfrak{g}_3, K_3)$ -加群として同型になる. このとき,  $\Pi$  の極小  $K_3$ -タイプは  $\tau_{(\delta_1 - \delta_3, \delta_2)}^{(3)}$  であり,  $\phi[\Pi] = \phi_{\nu_1}^{\delta_1} \oplus \phi_{\nu_2}^{\delta_2} \oplus \phi_{\nu_3}^{\delta_3}$  である.
- (2) ある  $\nu_1, \nu_2 \in \mathbb{C}$ ,  $\kappa \in \mathbb{Z}_{\geq 2}$ ,  $\delta \in \{0, 1\}$  が存在して,  $\Pi$  は一般主系列表現  $\text{Ind}_{P_{2,1}}^{G_3}(D_{(\nu_1, \kappa)} \boxtimes \chi_{(\nu_2, \delta)})$  と  $(\mathfrak{g}_3, K_3)$ -加群として同型になる. このとき,  $\Pi$  の極小  $K_3$ -タイプは  $\tau_{(\kappa, \delta)}^{(3)}$  であり,  $\phi[\Pi] = \phi_{\nu_1 + (\kappa - 1)/2, \kappa - 1} \oplus \phi_{\nu_2}^\delta$  である.

Whittaker 模型を持つ  $G_2$  の既約許容 Hilbert 表現  $\pi$  に対して, 次のいずれかが成立する:

- (1) ある  $\nu'_1, \nu'_2 \in \mathbb{C}$  と  $\delta'_1 \geq \delta'_2$  をみたす  $\delta'_1, \delta'_2 \in \{0, 1\}$  が存在して,  $\pi$  は主系列表現  $\text{Ind}_{P_{1,1}}^{G_2}(\chi_{(\nu'_1, \delta'_1)} \boxtimes \chi_{(\nu'_2, \delta'_2)})$  と  $(\mathfrak{g}_2, K_2)$ -加群として同型になる. このとき,

$$\Lambda(\pi) = \{(\delta'_1 - \delta'_2, \delta'_2)\} \cup \{(\lambda'_1, 0) \mid \lambda'_1 \in \delta'_1 - \delta'_2 + 2\mathbb{Z}_{>0}\}$$

とおくと,  $\pi$  の  $K_2$ -タイプは  $\tau_{\lambda'}^{(2)}$  ( $\lambda' \in \Lambda(\pi)$ ) であり,  $\phi[\pi] = \phi_{\nu'_1}^{\delta'_1} \oplus \phi_{\nu'_2}^{\delta'_2}$  である.

- (2) ある  $\nu' \in \mathbb{C}$  と  $\kappa' \in \mathbb{Z}_{\geq 2}$  が存在して,  $\pi$  は本質的離散系列表現  $D_{(\nu', \kappa')}$  と  $(\mathfrak{g}_2, K_2)$ -加群として同型になる. このとき,  $\Lambda(\pi) = \{(\lambda'_1, 0) \mid \lambda'_1 \in \kappa' + 2\mathbb{Z}_{\geq 0}\}$  とおくと,  $\pi$  の  $K_2$ -タイプは  $\tau_{\lambda'}^{(2)}$  ( $\lambda' \in \Lambda(\pi)$ ) であり,  $\phi[\pi] = \phi_{\nu' + (\kappa' - 1)/2, \kappa' - 1}$  である.

次に,  $F = \mathbb{C}$  の場合について述べる.  $\nu \in \mathbb{C}$  と  $d \in \mathbb{Z}$  に対して,  $\chi_{[\nu, d]}: G_1 \rightarrow \mathbb{C}^\times$  を  $\chi_{[\nu, d]}(t) = (t/|t|)^d |t|_\mathbb{C}^\nu$  ( $t \in G_1$ ) で定義される指標とする. Whittaker 模型を持つ  $G_3$  の既約許容 Hilbert 表現  $\Pi$  に対して, ある  $\nu_1, \nu_2, \nu_3 \in \mathbb{C}$  と  $d_1 \geq d_2 \geq d_3$  をみたす  $d_1, d_2, d_3 \in \mathbb{Z}$  が存在して,  $\Pi$  は主系列表現  $\text{Ind}_{P_{1,1,1}}^{G_3}(\chi_{[\nu_1, d_1]} \boxtimes \chi_{[\nu_2, d_2]} \boxtimes \chi_{[\nu_3, d_3]})$  と  $(\mathfrak{g}_3, K_3)$ -加群として同型になる. このとき,  $\Pi$  の極小  $K_3$ -タイプは  $\tau_{(d_1, d_2, d_3)}^{(3)}$  であり,  $\phi[\Pi] = \phi_{\nu_1}^{d_1} \oplus \phi_{\nu_2}^{d_2} \oplus \phi_{\nu_3}^{d_3}$  である. Whittaker 模型を持つ  $G_2$  の既約許容 Hilbert 表現  $\pi$  に対して, ある  $\nu'_1, \nu'_2 \in \mathbb{C}$  と  $d'_1 \geq d'_2$  をみたす  $d'_1, d'_2 \in \mathbb{Z}$  が存在して,  $\pi$  は主系列表現  $\text{Ind}_{P_{1,1}}^{G_2}(\chi_{[\nu'_1, d'_1]} \boxtimes \chi_{[\nu'_2, d'_2]})$  と  $(\mathfrak{g}_2, K_2)$ -加群として同型になる. このとき,  $\Lambda(\pi) = \{(d'_1 + m, d'_2 - m) \mid m \in \mathbb{Z}_{\geq 0}\}$  とおくと,  $\pi$  の  $K_2$ -タイプは  $\tau_{\lambda'}^{(2)}$  ( $\lambda' \in \Lambda(\pi)$ ) であり,  $\phi[\pi] = \phi_{\nu'_1}^{d'_1} \oplus \phi_{\nu'_2}^{d'_2}$  である.

#### 4.4 Whittaker 関数の明示式

この節では,  $n = 2, 3$  の場合に,  $G_n$  上の Whittaker 関数の動径成分の明示式を紹介する.

まず,  $n = 3$  の場合について, 論文 [HIM] で与えた明示式を紹介する.  $(\Pi, H_\Pi)$  を Whittaker 模型を持つ  $G_3$  の既約許容 Hilbert 表現とし,  $\lambda \in \Lambda_3$  を  $(\tau_\lambda^{(3)}, V_\lambda^{(3)})$  が  $\Pi$  の極小  $K_3$ -タイプになるようにとる. 極小  $K_3$ -タイプは  $\Pi|_{K_3}$  に重複度 1 で現れるから,  $V_\lambda^{(3)}$  から  $\mathcal{W}(\Pi, \psi)_{K_3}$  への  $K_3$ -準同型写像は定数倍を除いて唯一つである. 適当に正規化した  $V_\lambda^{(3)}$  から  $\mathcal{W}(\Pi, \psi)_{K_3}$  への非自明な  $K_3$ -準同型写像を  $\mathbf{W}_\Pi$  と書く事にする.

$F = \mathbb{R}$  の場合,  $v$  が単項式  $z_1^{r_1} z_2^{r_2} z_3^{r_3}$  の自然な射  $\mathcal{P}_\lambda \rightarrow V_\lambda^{(3)}$  による像であるとき,

$$\mathbf{W}_\Pi(v)(y) = (\sqrt{-1}l/|l|)^{r_1-r_3} y_1 y_2 \frac{(y_2 y_3)^\gamma}{(2\pi\sqrt{-1})^2} \int_{[\alpha_2]} \int_{[\alpha_1]} \frac{\Gamma_v(s_1, s_2)(|l|y_1)^{-s_1}(|l|y_2)^{-s_2}}{\Gamma_{\mathbb{R}}(s_1 + s_2 + r_1 + r_3)} ds_1 ds_2$$

$$(y = \text{diag}(y_1 y_2 y_2, y_2 y_3, y_3) \in A_3)$$

となる. ここで,  $\int_{[\alpha]}$  の積分路は  $\alpha - \sqrt{-1}\infty$  から  $\alpha + \sqrt{-1}\infty$  への実軸と垂直な直線とし,  $\alpha_1, \alpha_2$  は十分大きい実数とする. また,  $\gamma$  と  $\Gamma_v(s_1, s_2)$  は次で与えられる:

(1)  $\Pi \simeq \text{Ind}_{P_{1,1,1}}^{G_3} (\chi_{(\nu_1, \delta_1)} \boxtimes \chi_{(\nu_2, \delta_2)} \boxtimes \chi_{(\nu_3, \delta_3)})$  ( $\delta_1 \geq \delta_2 \geq \delta_3$ ) のとき,  $\gamma = \nu_1 + \nu_2 + \nu_3$ ,

$$\Gamma_v(s_1, s_2) = \prod_{i=1}^3 \Gamma_{\mathbb{R}}(s_1 + \nu_i + r_1 + (-1)^{r_1} |\delta_i - \delta_2|) \Gamma_{\mathbb{R}}(s_2 - \nu_i + r_3 + (-1)^{r_3} |\delta_i - \delta_2|).$$

(2)  $\Pi \simeq \text{Ind}_{P_{2,1}}^{G_3} (D_{(\nu_1, \kappa)} \boxtimes \chi_{(\nu_2, \delta)})$  のとき,  $\gamma = 2\nu_1 + \nu_2$ ,

$$\Gamma_v(s_1, s_2) = \Gamma_{\mathbb{C}}\left(s_1 + \nu_1 + \frac{\kappa - 1}{2}\right) \Gamma_{\mathbb{C}}\left(s_2 - \nu_1 + \frac{\kappa - 1}{2}\right)$$

$$\times \Gamma_{\mathbb{R}}(s_1 + \nu_2 + r_1) \Gamma_{\mathbb{R}}(s_2 - \nu_2 + r_3).$$

$F = \mathbb{C}$  の場合,  $\Pi \simeq \text{Ind}_{P_{1,1,1}}^{G_3} (\chi_{[\nu_1, d_1]} \boxtimes \chi_{[\nu_2, d_2]} \boxtimes \chi_{[\nu_3, d_3]})$  ( $d_1 \geq d_2 \geq d_3$ ) であり,  $v$  が単項式  $z_1^{r_1} z_{13}^{r_{13}} z_2^{r_2} z_{23}^{r_{23}} z_3^{r_3} z_{12}^{r_{12}}$  の自然な射  $\mathcal{P}_\lambda \rightarrow V_\lambda^{(3)}$  による像であるとき,

$$\mathbf{W}_\Pi(v)(y) = (\sqrt{-1}l/|l|)^{l_1+l_{12}-l_3-l_{23}} y_1^2 y_2^2 (y_2 y_3)^{2\nu_1+2\nu_2+2\nu_3}$$

$$\times \frac{1}{(2\pi\sqrt{-1})^2} \int_{[\alpha_2]} \int_{[\alpha_1]} \frac{\Gamma_v(s_1, s_2)(|l|y_1)^{-2s_1}(|l|y_2)^{-2s_2}}{\Gamma_{\mathbb{C}}(s_1 + s_2 + (r_1 + r_3 + r_{12} + r_{23})/2)} ds_1 ds_2$$

$$(y = \text{diag}(y_1 y_2 y_2, y_2 y_3, y_3) \in A_3)$$

となる. ここで,  $\alpha_1, \alpha_2$  は十分大きい実数とし,  $\Gamma_v(s_1, s_2)$  は次で与えられる:

$$\Gamma_v(s_1, s_2) = \Gamma_{\mathbb{C}}(s_1 + \nu_1 + (r_2 + r_3 + r_{23})/2) \Gamma_{\mathbb{C}}(s_2 - \nu_1 + (r_1 + r_2 + r_{12})/2)$$

$$\times \Gamma_{\mathbb{C}}(s_1 + \nu_2 + (r_1 + r_{23})/2) \Gamma_{\mathbb{C}}(s_2 - \nu_2 + (r_3 + r_{12})/2)$$

$$\times \Gamma_{\mathbb{C}}(s_1 + \nu_3 + (r_1 + r_{12} + r_{13})/2) \Gamma_{\mathbb{C}}(s_2 - \nu_3 + (r_3 + r_{13} + r_{23})/2).$$

次に,  $n = 2$  の場合について述べる.  $(\pi, H_\pi)$  を Whittaker 模型を持つ  $G_2$  の既約許容 Hilbert 表現とし,  $\lambda' \in \Lambda(\pi)$  とする.  $K_2$ -タイプ  $\tau_{\lambda'}^{(2)}$  は  $\pi|_{K_2}$  に重複度 1 で現れるから,  $V_{\lambda'}^{(2)}$  から  $\mathcal{W}(\Pi, \psi_l)_{K_2}$  への  $K_2$ -準同型写像は定数倍を除いて唯 1 つである. 適当に正規化した  $V_{\lambda'}^{(2)}$  から  $\mathcal{W}(\Pi, \psi_l)_{K_2}$  への非自明な  $K_2$ -準同型写像を  $\mathbf{W}_{\pi, \lambda'}$  と書く事にする.

$F = \mathbb{R}$  の場合, 任意の  $\lambda' \in \Lambda(\pi)$  と  $q' \in S_{\lambda'}$  に対して,  $\mathbf{W}_{\pi, \lambda'}(v_{\lambda', q'})|_{A_2}$  の明示式は様々な文献に書かれている. ここでは, 本稿での計算に必要な結果のみ述べておく.

(1)  $\pi \simeq \text{Ind}_{P_{1,1}}^{G_2}(\chi_{(\nu'_1, \delta'_1)} \boxtimes \chi_{(\nu'_2, \delta'_2)})$  ( $\delta'_1 \geq \delta'_2$ ) とする.

- $\delta'_1 = \delta'_2$  のとき,  $q' \in S_{(2,0)}$  と  $y = \text{diag}(y_1 y_2, y_2) \in A_2$  に対して,

$$\begin{aligned} \mathbf{W}_{\pi, (0, \delta'_2)}(v_{(0, \delta'_2), 0})(y) &= \frac{y_1^{1/2} y_2^{\nu'_1 + \nu'_2}}{2\pi\sqrt{-1}} \int_{[\alpha]} \Gamma_{\mathbb{R}}(s + \nu'_1) \Gamma_{\mathbb{R}}(s + \nu'_2) (|l|y_1)^{-s} ds, \\ \mathbf{W}_{\pi, (2,0)}(v_{(2,0), q'})(y) &= \text{sgn}(q') \delta'_1 \frac{y_1^{1/2} y_2^{\nu'_1 + \nu'_2}}{2\pi\sqrt{-1}} \int_{[\alpha]} \{ \Gamma_{\mathbb{R}}(s + \nu'_1 + 2) \Gamma_{\mathbb{R}}(s + \nu'_2) \\ &\quad + (q'l/|l|) \Gamma_{\mathbb{R}}(s + \nu'_1 + 1) \Gamma_{\mathbb{R}}(s + \nu'_2 + 1) + \Gamma_{\mathbb{R}}(s + \nu'_1) \Gamma_{\mathbb{R}}(s + \nu'_2 + 2) \\ &\quad - (2\pi)^{-1} \Gamma_{\mathbb{R}}(s + \nu'_1) \Gamma_{\mathbb{R}}(s + \nu'_2) \} (|l|y_1)^{-s} ds. \end{aligned}$$

- $(\delta'_1, \delta'_2) = (1, 0)$  のとき,  $q' \in S_{(1,0)}$  と  $y = \text{diag}(y_1 y_2, y_2) \in A_2$  に対して,

$$\begin{aligned} \mathbf{W}_{\pi, (1,0)}(v_{(1,0), q'})(y) &= \frac{y_1^{1/2} y_2^{\nu'_1 + \nu'_2}}{2\pi\sqrt{-1}} \int_{[\alpha]} \{ \Gamma_{\mathbb{R}}(s + \nu'_1 + 1) \Gamma_{\mathbb{R}}(s + \nu'_2) \\ &\quad + (q'l/|l|) \Gamma_{\mathbb{R}}(s + \nu'_1) \Gamma_{\mathbb{R}}(s + \nu'_2 + 1) \} (|l|y_1)^{-s} ds. \end{aligned}$$

(2)  $\pi \simeq D_{(\nu', \kappa')}$  とする.  $q' \in S_{(\kappa', 0)}$  と  $y = \text{diag}(y_1 y_2, y_2) \in A_2$  に対して,

$$\mathbf{W}_{\pi, (\kappa', 0)}(v_{(\kappa', 0), q'})(y) = \begin{cases} \frac{y_1^{1/2} y_2^{2\nu'}}{2\pi\sqrt{-1}} \int_{[\alpha]} \Gamma_{\mathbb{C}}\left(s + \nu' + \frac{\kappa' - 1}{2}\right) (|l|y_1)^{-s} ds & \text{if } lq' > 0, \\ 0 & \text{otherwise.} \end{cases}$$

上の明示式において,  $\alpha$  は十分大きい実数とする.

$F = \mathbb{C}$  の場合, 極小  $K_2$ -タイプにおける Whittaker 関数の明示式は Popa の論文 [Po] で与えられている. Popa の明示式に  $U(\mathfrak{g}_2)$  の元を作用させる事で, 任意の  $K_2$ -タイプにおける Whittaker 関数の明示式が得られる.  $\pi \simeq \text{Ind}_{P_{1,1}}^{G_2}(\chi_{[\nu'_1, d'_1]} \boxtimes \chi_{[\nu'_2, d'_2]})$  ( $d'_1 \geq d'_2$ ) とし,  $\lambda' = (\lambda'_1, \lambda'_2) \in \Lambda(\pi)$  とする. このとき,  $q' \in S_{\lambda'}$  と  $y = \text{diag}(y_1 y_2, y_2) \in A_2$  に対して,

$$\begin{aligned} \mathbf{W}_{\pi, \lambda'}(v_{\lambda', q'})(y) &= (\sqrt{-1}l/|l|)^{\lambda'_1 - q'} y_1 y_2^{2\nu'_1 + 2\nu'_2} \sum_{i=0}^{q'} \binom{q'}{i} \frac{(d'_1 - \lambda'_1)_i (-\nu'_1 + \nu'_2 - \frac{\lambda'_1 - \lambda'_2}{2})_i}{(-\lambda'_1 + \lambda'_2)_i (2\pi|l|y_1)^i} \\ &\quad \times \frac{1}{2\pi\sqrt{-1}} \int_{[\alpha]} \Gamma_{\mathbb{C}}\left(s + \nu'_1 - \frac{d'_1 - \lambda'_1 - q' + i}{2}\right) \Gamma_{\mathbb{C}}\left(s + \nu'_2 + \frac{d'_1 - \lambda'_2 - q' + i}{2}\right) (|l|y_1)^{-2s} ds. \end{aligned}$$

ここで,  $(a)_i = \Gamma(a+i)/\Gamma(a)$  は Pochhammer 記号とし,  $\alpha$  は十分大きい実数とする.



## 5 $GL(3, F) \times GL(2, F)$ に関する局所ゼータ積分

### 5.1 主結果

$\Pi$  と  $\pi$  をそれぞれ Whittaker 模型を持つ  $G_3$  と  $G_2$  の既約許容 Hilbert 表現とする.  $W \in \mathcal{W}(\Pi, \psi_1)_{K_3}$  と  $W' \in \mathcal{W}(\pi, \psi_{-1})_{K_2}$  に対して, 局所ゼータ積分  $Z(s, W, W')$  を

$$Z(s, W, W') = \int_{N_2 \backslash G_2} W \left( \begin{array}{c|c} h & \\ \hline & 1 \end{array} \right) W'(h) |\det(h)|_F^{s-\frac{1}{2}} dh$$

で定義する. ここで,  $dh$  は  $N_2 \backslash G_2$  上の右  $G_2$ -不変測度とする. Jacquet と Shalika は論文 [JS] において, 任意の  $W \in \mathcal{W}(\Pi, \psi_1)_{K_3}$  と  $W' \in \mathcal{W}(\pi, \psi_{-1})_{K_2}$  に対して,  $\frac{Z(s, W, W')}{L(s, \Pi \times \pi)}$  は整関数であり, 局所関数等式

$$\frac{Z(1-s, \tilde{W}, \tilde{W}')}{L(1-s, \tilde{\Pi} \times \tilde{\pi})} = \epsilon(s, \Pi \times \pi, \psi_1) \frac{Z(s, W, W')}{L(s, \Pi \times \pi)}$$

を満たす事を示した. ここで,  $\tilde{\Pi}$  と  $\tilde{\pi}$  はそれぞれ  $\Pi$  と  $\pi$  の反傾表現とし,  $\tilde{W}$  と  $\tilde{W}'$  はそれぞれ次の式で定義される  $\mathcal{W}(\tilde{\Pi}, \psi_{-1})_{K_3}$  と  $\mathcal{W}(\tilde{\pi}, \psi_1)_{K_2}$  の元とする:

$$\tilde{W}(g) = W \left( \begin{pmatrix} & & 1 \\ & 1 & \\ 1 & & \end{pmatrix} t_g^{-1} \right), \quad \tilde{W}'(h) = W' \left( \begin{pmatrix} & & 1 \\ & 1 & \\ 1 & & \end{pmatrix} t_h^{-1} \right) \quad (g \in G_3, h \in G_2).$$

本稿の主結果は次の定理である:

**定理 5.1.**  $\Pi$  と  $\pi$  をそれぞれ Whittaker 模型を持つ  $G_3$  と  $G_2$  の既約許容 Hilbert 表現とする. このとき,

$$Z(s, W, W') = L(s, \Pi \times \pi)$$

を満たす  $W \in \mathcal{W}(\Pi, \psi_1)_{K_3}$  と  $W' \in \mathcal{W}(\pi, \psi_{-1})_{K_2}$  が存在する.

この定理は, 適切な Whittaker 関数を選び, 局所ゼータ積分を §4.4 の Whittaker 関数の明示式と次の Barnes' の補題を用いて計算する事で証明される:

**補題 5.2** ([Ba, §1.7]).  $-\min\{\operatorname{Re}(a), \operatorname{Re}(b)\} < \alpha < \min\{\operatorname{Re}(c), \operatorname{Re}(d)\}$  を満たす複素数  $a, b, c, d$  と実数  $\alpha$  に対して, 次の等式が成立する:

$$\frac{1}{2\pi\sqrt{-1}} \int_{[\alpha]} \Gamma(s+a)\Gamma(s+b)\Gamma(-s+c)\Gamma(-s+d)ds = \frac{\Gamma(a+c)\Gamma(a+d)\Gamma(b+c)\Gamma(b+d)}{\Gamma(a+b+c+d)}.$$

どのように Whittaker 関数を選べば良いかについては, 次の節で述べる.

## 5.2 局所 $L$ -因子を与える Whittaker 関数

$\rho \in \Lambda_2$  に対して,  $(\tilde{\tau}_\rho^{(2)}, \tilde{V}_\rho^{(2)})$  を  $\tau_\rho^{(2)}$  の反傾表現とし,  $\{\tilde{v}_{\rho,q}\}_{q \in S_\rho}$  を  $\{v_{\rho,q}\}_{q \in S_\rho}$  の双対基底とする. また,  $\rho = (\rho_1, \rho_2) \in \Lambda_2$  と  $q \in S_\rho$  に対して,  $\tilde{\rho} \in \Lambda_2, \tilde{q} \in S_{\tilde{\rho}}, c(\rho, q) \in \mathbb{C}$  を

$$\begin{aligned} \tilde{\rho} = \rho, \quad \tilde{q} = -q, \quad c(\rho, q) = 1 & \quad (F = \mathbb{R} \text{ の場合}), \\ \tilde{\rho} = (-\rho_2, -\rho_1), \quad \tilde{q} = \rho_1 - \rho_2 - q, \quad c(\rho, q) = (-1)^q \binom{\rho_1 - \rho_2}{q} & \quad (F = \mathbb{C} \text{ の場合}) \end{aligned}$$

と定義する. このとき,  $\tilde{v}_{\rho,q} \leftrightarrow c(\rho, q)v_{\tilde{\rho},\tilde{q}}$  という対応によって,  $\tilde{V}_\rho^{(2)} \simeq V_{\tilde{\rho}}^{(2)}$  となる.

$\Pi$  と  $\pi$  をそれぞれ Whittaker 模型を持つ  $G_3$  と  $G_2$  の既約許容 Hilbert 表現とする.  $\lambda' \in \Lambda(\pi)$  に対して,  $K_2$ -準同型写像  $\mathbf{W}_{\pi,\lambda'}: V_{\lambda'}^{(2)} \rightarrow \mathcal{W}(\pi, \psi_{-1})_{K_2}$  を §4.4 のようにとる. また, 埋め込み (3.1) によって,  $K_2$  を  $K_3$  の部分群と見なす. このとき, Schur の直交関係式により, 次の補題が得られる.

**補題 5.3.** 上の記法を用いる.  $\rho \in \Lambda_2$  とし,  $\mathbf{W}: V_\rho^{(2)} \rightarrow \mathcal{W}(\Pi, \psi_1)_{K_3}$  を  $K_2$ -準同型写像とする.  $q \in S_\rho$  と  $q' \in S_{\lambda'}$  に対して,  $Z(s, \mathbf{W}(v_{\rho,q}), \mathbf{W}_{\pi,\lambda'}(v_{\lambda',q'}))$  は,  $(\lambda', q') = (\tilde{\rho}, \tilde{q})$  ならば

$$\frac{1}{\dim V_\rho^{(2)}} \sum_{r \in S_\rho} \frac{c(\rho, r)}{c(\rho, q)} \int_0^\infty \int_0^\infty \mathbf{W}(v_{\rho,r}) \left( \begin{array}{c|c} y & \\ \hline & 1 \end{array} \right) \mathbf{W}_{\pi,\tilde{\rho}}(v_{\tilde{\rho},\tilde{r}})(y) |y_1|_F^{s-\frac{3}{2}} |y_2|_F^{2s-1} \frac{dy_1}{y_1} \frac{dy_2}{y_2}$$

と等しくなり, それ以外ならば 0 になる. ただし,  $y = \text{diag}(y_1 y_2, y_2) \in A_2$  とする.

$\lambda \in \Lambda_3$  を  $\tau_\lambda^{(3)}$  が  $\Pi$  の極小  $K_3$ -タイプになるようにとる. §4.4 で与えた  $\Pi$  に付随する Whittaker 関数の明示式は, 極小  $K_3$ -タイプ  $\tau_\lambda^{(3)}$  におけるもののみである. しかし, 補題 5.3 より,  $\tilde{\rho} \in \Lambda(\pi)$  を満たす  $\rho \in \Sigma(\lambda)$  が存在しない場合, 極小  $K_3$ -タイプ  $\tau_\lambda^{(3)}$  における  $\Pi$  に付随する Whittaker 関数  $W$  と  $W' \in \mathcal{W}(\pi, \psi_{-1})_{K_2}$  をどのように選んでも  $Z(s, W, W') = 0$  となってしまう. 以下では, この問題を解決するために, 様々な  $\rho \in \Lambda_2$  に対して,  $K_2$ -準同型写像  $\mathbf{W}: V_\rho^{(2)} \rightarrow \mathcal{W}(\Pi, \psi_1)_{K_3}$  を構成する方法を紹介する.

まず,  $\Lambda_2$  の部分集合  $\Sigma_n$  を

$$\Sigma_n = \begin{cases} \{(\sigma_1, 0) \mid \sigma_1 \in \mathbb{Z}_{\geq 0}\} & (F = \mathbb{R} \text{ の場合}), \\ \{(\sigma_1, \sigma_2) \in \mathbb{Z}^2 \mid \sigma_1 \geq 0 \geq \sigma_2\} & (F = \mathbb{C} \text{ の場合}) \end{cases}$$

で定める.  $\sigma = (\sigma_1, \sigma_2) \in \Sigma_n$  と  $r \in S_\sigma$  に対して,  $U(\mathfrak{g}_3)$  の元  $E_{\sigma,r}$  を

- $F = \mathbb{R}$  の場合:  $E_{\sigma,r} = (E_{23} \otimes 1 - \text{sgn}(r)E_{13} \otimes \sqrt{-1})^{\sigma_1}$ ,
- $F = \mathbb{C}$  の場合:

$$\begin{aligned} E_{\sigma,r} &= \sum_{i=\max\{0, r-\sigma_1\}}^{\min\{-\sigma_2, r\}} \begin{pmatrix} \sigma_1 - \sigma_2 - r \\ -\sigma_2 - i \end{pmatrix} \begin{pmatrix} r \\ i \end{pmatrix} \\ &\times (E_{13} \otimes 1 - \sqrt{-1}E_{13} \otimes \sqrt{-1})^{\sigma_1 - r + i} (E_{23} \otimes 1 - \sqrt{-1}E_{23} \otimes \sqrt{-1})^{r-i} \\ &\times (E_{23} \otimes 1 + \sqrt{-1}E_{23} \otimes \sqrt{-1})^{-\sigma_2 - i} (-E_{13} \otimes 1 - \sqrt{-1}E_{13} \otimes \sqrt{-1})^i \end{aligned}$$

で定義する.  $\sigma \in \Sigma_n$  に対して,  $D_\sigma$  を  $E_{\sigma,r}$  ( $r \in S_\sigma$ ) によって張られる  $\mathbb{C}$  上のベクトル空間とする. このとき,  $D_\sigma$  は  $K_2$  の随伴作用  $\text{Ad}$  で閉じており,  $(\text{Ad}, D_\sigma)$  は  $K_2$  の既約表現となる. さらに,  $E_{\sigma,r} \leftrightarrow v_{\sigma,r}$  という対応によって,  $D_\sigma \simeq V_\sigma^{(2)}$  となる.

$K_3$ -準同型写像  $\mathbf{W}_\Pi: V_\lambda^{(3)} \rightarrow \mathcal{W}(\Pi, \psi_1)_{K_3}$  を §4.4 のようにとる.  $\sigma = (\sigma_1, \sigma_2) \in \Sigma_n$  と  $\mu \in \Sigma(\lambda)$  に対して,  $K_2$ -準同型写像  $\mathbf{W}_\Pi^{\sigma,\mu}: V_\sigma^{(2)} \otimes_{\mathbb{C}} V_\mu^{(2)} \rightarrow \mathcal{W}(\Pi, \psi_1)_{K_3}$  を

$$\mathbf{W}_\Pi^{\sigma,\mu}(v_{\sigma,r} \otimes v_{\mu,q}) = E_{\sigma,r} \mathbf{W}_\Pi(v_{\mu,q}^\lambda) \quad (r \in S_\sigma, q \in S_\mu)$$

で定める. このとき,  $y = \text{diag}(y_1 y_2 y_3, y_2 y_3, y_3) \in A_3$  に対して,

$$\mathbf{W}_\Pi^{\sigma,\mu}(v_{\sigma,r} \otimes v_{\mu,q})(y) = \begin{cases} 0 & (F = \mathbb{C} \text{ かつ } r \neq \sigma_1 \text{ の場合}), \\ (2\pi\sqrt{-1}y_2)^{\sigma_1 - \sigma_2} \mathbf{W}_\Pi(v_{\mu,q}^\lambda)(y) & (\text{その他の場合}) \end{cases}$$

より,  $\mathbf{W}_\Pi^{\sigma,\mu}(v_{\sigma,r} \otimes v_{\mu,q})|_{A_3}$  の明示式は  $\mathbf{W}_\Pi(v_{\mu,q}^\lambda)|_{A_3}$  の明示式から得られる事に注意する.

$V_\sigma^{(2)} \otimes_{\mathbb{C}} V_\mu^{(2)}$  は,  $K_2$ -加群として重複度 1 で既約分解される事が知られている. すなわち,  $\Lambda_2$  のある部分集合  $\Sigma(\sigma, \mu)$  が存在して,  $V_\sigma^{(2)} \otimes_{\mathbb{C}} V_\mu^{(2)} \simeq \bigoplus_{\rho \in \Sigma(\sigma, \mu)} V_\rho^{(2)}$  となる.  $\rho \in \Sigma(\sigma, \mu)$  に対して,  $I_\rho^{\sigma,\mu}: V_\rho^{(2)} \rightarrow V_\sigma^{(2)} \otimes_{\mathbb{C}} V_\mu^{(2)}$  を適当に正規化した非自明な  $K_2$ -準同型写像とする.  $K_2$ -準同型写像  $\mathbf{W}_{\Pi,\rho}^{\sigma,\mu}: V_\rho^{(2)} \rightarrow \mathcal{W}(\Pi, \psi_1)_{K_3}$  を  $\mathbf{W}_{\Pi,\rho}^{\sigma,\mu} = \mathbf{W}_\Pi^{\sigma,\mu} \circ I_\rho^{\sigma,\mu}$  と定義する.

$F = \mathbb{R}$  の場合,  $\sigma = (\sigma_1, 0) \in \Sigma_n$  と  $\mu = (\mu_1, \mu_2) \in \Sigma(\lambda)$  に対して,

$$\Sigma(\sigma, \mu) = \begin{cases} \{(2\sigma_1, 0), (0, 0), (0, 1)\} & (\sigma_1 = \mu_1 > 0 \text{ の場合}), \\ \{(0, \mu_2)\} & (\sigma_1 = \mu_1 = 0 \text{ の場合}), \\ \{(\sigma_1 + \mu_1, 0)\} & (\sigma_1 \neq \mu_1 \text{ かつ } \sigma_1 \mu_1 = 0 \text{ の場合}), \\ \{(\sigma_1 + \mu_1, 0), (|\sigma_1 - \mu_1|, 0)\} & (\text{その他の場合}) \end{cases}$$

である. さらに,  $\rho \in \Sigma(\sigma, \mu)$  に対して,  $I_\rho^{\sigma,\mu}$  の明示的な表示は以下のようになる:

- $\sigma_1 \neq \mu_1$  または  $\sigma_1 = \mu_1 = 0$  の場合,  $r + q \in S_\rho$  を満たす  $r \in S_\sigma$  と  $q \in S_\mu$  に対して,

$$I_\rho^{\sigma,\mu}(v_{\rho,r+q}) = \text{sgn}(r+q)^{\mu_2} v_{\sigma,r} \otimes v_{\mu,q}.$$

- $\sigma_1 = \mu_1 > 0$  の場合,

$$I_{(2\sigma_1, 0)}^{\sigma,\mu}(v_{(2\sigma_1, 0), 2q}) = v_{\sigma,q} \otimes v_{\mu,q} \quad (q \in S_\sigma),$$

$$I_{(0, 0)}^{\sigma,\mu}(v_{(0, 0), 0}) = v_{\sigma, \sigma_1} \otimes v_{\mu, -\sigma_1} + v_{\sigma, -\sigma_1} \otimes v_{\mu, \sigma_1},$$

$$I_{(0, 1)}^{\sigma,\mu}(v_{(0, 1), 0}) = v_{\sigma, \sigma_1} \otimes v_{\mu, -\sigma_1} - v_{\sigma, -\sigma_1} \otimes v_{\mu, \sigma_1}.$$

これらの表示により, 各  $\rho \in \Sigma(\sigma, \mu)$  に対して,  $\mathbf{W}_{\Pi,\rho}^{\sigma,\mu}(v_{\rho,q})|_{A_3}$  ( $q \in S_\rho$ ) の明示的な表示を得る事ができる. 次のように  $\sigma, \mu, \rho$  をとれば, 局所ゼータ積分  $Z(s, \mathbf{W}_{\Pi,\rho}^{\sigma,\mu}(v_{\rho,q}), \mathbf{W}_{\pi,\bar{\rho}}(v_{\bar{\rho},\bar{q}}))$  ( $q \in S_\rho$ ) は 0 でない定数倍を除いて  $L(s, \Pi \times \pi)$  と一致する事が直接計算によって確認できる.

(1)  $\Pi \simeq \text{Ind}_{P_{1,1,1}}^{G_3} (\chi_{(\nu_1, \delta_1)} \boxtimes \chi_{(\nu_2, \delta_2)} \boxtimes \chi_{(\nu_3, \delta_3)})$  ( $\delta_1 \geq \delta_2 \geq \delta_3$ ) とする.

(1-1)  $\pi \simeq \text{Ind}_{P_{1,1}}^{G_2} (\chi_{(\nu'_1, \delta'_1)} \boxtimes \chi_{(\nu'_2, \delta'_2)})$  ( $\delta'_1 \geq \delta'_2$ ) とする.

(1-1-1)  $\delta'_1 = \delta'_2 = \delta_2$  の場合:  $\sigma = (0, 0), \quad \mu = (0, \delta'_2), \quad \rho = (0, \delta'_2).$

(1-1-2)  $\delta'_1 = \delta'_2 \neq \delta_2$  かつ  $\delta_1 = \delta_3$  の場合:  $\sigma = (2, 0), \quad \mu = (0, \delta_2), \quad \rho = (2, 0).$

(1-1-3)  $\delta'_1 = \delta'_2 \neq \delta_2$  かつ  $\delta_1 > \delta_3$  の場合:  $\sigma = (1, 0), \quad \mu = (1, 0), \quad \rho = (0, \delta'_2).$

(1-1-4)  $(\delta'_1, \delta'_2) = (1, 0)$  かつ  $\delta_1 = \delta_3$  の場合:  $\sigma = (1, 0), \quad \mu = (0, \delta_2), \quad \rho = (1, 0).$

(1-1-5)  $(\delta'_1, \delta'_2) = (1, 0)$  かつ  $\delta_1 > \delta_3$  の場合:  $\sigma = (0, 0), \quad \mu = (1, 0), \quad \rho = (1, 0).$

(1-2)  $\pi \simeq D_{(\nu', \kappa')}$  とする.

(1-2-1)  $\delta_1 = \delta_3$  の場合:  $\sigma = (\kappa', 0), \quad \mu = (0, \delta_2), \quad \rho = (\kappa', 0).$

(1-2-2)  $\delta_1 > \delta_3$  の場合:  $\sigma = (\kappa' - 1, 0), \quad \mu = (1, 0), \quad \rho = (\kappa', 0).$

(2)  $\Pi \simeq \text{Ind}_{P_{2,1}}^{G_3} (D_{(\nu_1, \kappa)} \boxtimes \chi_{(\nu_2, \delta)})$  とする.

(2-1)  $\pi \simeq \text{Ind}_{P_{1,1}}^{G_2} (\chi_{(\nu'_1, \delta'_1)} \boxtimes \chi_{(\nu'_2, \delta'_2)})$  ( $\delta'_1 \geq \delta'_2$ ) とする.

(2-1-1)  $\delta'_1 = \delta'_2 \neq \delta$  の場合:  $\sigma = (1, 0), \quad \mu = (1, 0), \quad \rho = (0, \delta'_2).$

(2-1-2)  $(\delta'_1, \delta'_2) = (1, 0)$  の場合:  $\sigma = (0, 0), \quad \mu = (1, 0), \quad \rho = (1, 0).$

(2-1-3)  $\delta'_2 = \delta$  の場合:  $\sigma = (0, 0), \quad \mu = (\delta'_1 - \delta'_2, \delta'_2), \quad \rho = (\delta'_1 - \delta'_2, \delta'_2).$

(2-2)  $\pi \simeq D_{(\nu', \kappa')}$  とする.

(2-2-1)  $\kappa' \leq \kappa$  の場合:  $\sigma = (0, 0), \quad \mu = (\kappa', 0), \quad \rho = (\kappa', 0).$

(2-2-2)  $\kappa' \geq \kappa$  の場合:  $\sigma = (\kappa' - \kappa, 0), \quad \mu = (\kappa, 0), \quad \rho = (\kappa', 0).$

$F = \mathbb{C}$  の場合,  $\sigma \in \Sigma_n$  と  $\mu \in \Sigma(\lambda)$  に対して,  $\Sigma(\sigma, \mu) = \{\sigma + \mu + (-i, i) \mid i \in S_\sigma \cap S_\mu\}$  である. さらに,  $\rho \in \Sigma(\sigma, \mu)$  に対して,  $I_\rho^{\sigma, \mu}$  の明示的な表示は Koornwinder の論文 [Ko] で与えられている. 従って, 各  $\rho \in \Sigma(\sigma, \mu)$  に対して,  $\mathbf{W}_{\Pi, \rho}^{\sigma, \mu}(v_{\rho, q})|_{A_3}$  ( $q \in S_\rho$ ) の明示的な表示を得る事ができる.  $\Pi \simeq \text{Ind}_{P_{1,1,1}}^{G_3} (\chi_{[\nu_1, d_1]} \boxtimes \chi_{[\nu_2, d_2]} \boxtimes \chi_{[\nu_3, d_3]})$  ( $d_1 \geq d_2 \geq d_3$ ) とし,  $\pi \simeq \text{Ind}_{P_{1,1}}^{G_2} (\chi_{[\nu'_1, d'_1]} \boxtimes \chi_{[\nu'_2, d'_2]})$  ( $d'_1 \geq d'_2$ ) とする. 次のように  $\sigma, \mu, \rho$  をとれば, 局所ゼータ積分  $Z(s, \mathbf{W}_{\Pi, \rho}^{\sigma, \mu}(v_{\rho, q}), \mathbf{W}_{\pi, \bar{\rho}}^{\sigma, \mu}(v_{\bar{\rho}, \bar{q}}))$  ( $q \in S_\rho$ ) は 0 でない定数倍を除いて  $L(s, \Pi \times \pi)$  と一致する事が直接計算によって確認できる.

(3-3-1)  $-d'_1 \geq d_1$  の場合:

$$\sigma = (-d'_1 - d'_2 - d_1 - d_2, 0), \quad \mu = (d_1, d_2), \quad \rho = (-d'_1 - d'_2 - d_1, d_1).$$

(3-3-2)  $-d'_2 \geq d_1 \geq -d'_1 \geq d_2$  の場合:

$$\sigma = (-d'_1 - d'_2 - d_1 - d_2, 0), \quad \mu = (d_1, d_2), \quad \rho = (-d'_2, -d'_1).$$

(3-3-3)  $-d'_2 \geq d_1$  かつ  $d_2 \geq -d'_1 \geq d_3$  の場合 :

$$\sigma = (-d'_2 - d_1, 0), \quad \mu = (d_1, -d'_1), \quad \rho = (-d'_2, -d'_1).$$

(3-3-4)  $-d'_2 \geq d_1$  かつ  $d_3 \geq -d'_1$  の場合 :

$$\sigma = (-d'_2 - d_1, -d'_1 - d_3), \quad \mu = (d_1, d_3), \quad \rho = (-d'_2, -d'_1).$$

(3-3-5)  $d_1 \geq -d'_2 \geq -d'_1 \geq d_2$  の場合 :

$$\sigma = (-d'_1 - d_2, 0), \quad \mu = (-d'_2, d_2), \quad \rho = (-d'_2, -d'_1).$$

(3-3-6)  $d_1 \geq -d'_2 \geq d_2 \geq -d'_1 \geq d_3$  の場合 :

$$\sigma = (0, 0), \quad \mu = (-d'_2, -d'_1), \quad \rho = (-d'_2, -d'_1).$$

ここで,

(3-3-7)  $d_2 \geq -d'_2 \geq -d'_1 \geq d_3$  の場合.

(3-3-8)  $d_1 \geq -d'_2 \geq d_2$  かつ  $d_3 \geq -d'_1$  の場合.

(3-3-9)  $d_2 \geq -d'_2 \geq d_3 \geq -d'_1$  の場合.

(3-3-10)  $d_3 \geq -d'_2$  の場合.

はそれぞれ (3-3-5), (3-3-3), (3-3-2), (3-3-1) の反傾の場合であるから, 局所関数等式を用いる事で,  $Z(s, W, W') = L(s, \Pi \times \pi)$  となる  $W \in \mathcal{W}(\Pi, \psi_1)_{K_3}$  と  $W' \in \mathcal{W}(\pi, \psi_{-1})_{K_2}$  が存在する事は証明できるので, ここでは省略する.

## 参考文献

- [Ba] W. N. Bailey. *Generalized hypergeometric series*. Cambridge Tracts in Mathematics and Mathematical Physics, No. 32. Stechert-Hafner, Inc., New York, 1964.
- [HIM] Miki Hirano, Taku Ishii, and Tadashi Miyazaki. The Archimedean Whittaker functions on  $GL(3)$ . In *Geometry and analysis of automorphic forms of several variables*, volume 7 of *Ser. Number Theory Appl.*, pages 77–109. World Sci. Publ., Hackensack, NJ, 2012.
- [Ja] Hervé Jacquet. Archimedean Rankin-Selberg integrals. In *Automorphic forms and L-functions II. Local aspects*, volume 489 of *Contemp. Math.*, pages 57–172. Amer. Math. Soc., Providence, RI, 2009.
- [JS] Hervé Jacquet and Joseph Shalika. Rankin-Selberg convolutions: Archimedean theory. In *Festschrift in honor of I. I. Piatetski-Shapiro on the occasion of his sixtieth birthday, Part I (Ramat Aviv, 1989)*, volume 2 of *Israel Math. Conf. Proc.*, pages 125–207. Weizmann, Jerusalem, 1990.
- [Ko] T. H. Koornwinder. Clebsch-Gordan coefficients for  $SU(2)$  and Hahn polynomials. *Nieuw Arch. Wisk. (3)*, 29(2):140–155, 1981.

- [Po] Alexandru A. Popa. Whittaker newforms for Archimedean representations. *J. Number Theory*, 128(6):1637–1645, 2008.
- [Sha] J. A. Shalika. The multiplicity one theorem for  $GL_n$ . *Ann. of Math. (2)*, 100:171–193, 1974.
- [St] Eric Stade. Mellin transforms of  $GL(n, \mathbb{R})$  Whittaker functions. *Amer. J. Math.*, 123(1):121–161, 2001.